

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第五回

8章

新天地・佐倉順天堂

天保十四年（一八四三）

てんぽう
天保十二年閏一月七日（一八四一年二月二七日）、十一代將軍徳
いえなり せいきよ
川家斉が逝去した。

五十年にわたる長い治世の間に、大きな改革が行なわれた。

幼い將軍を補佐した松平定信の「寛政かんせいの改革」は、儉約を主とするものだった。だが口やかましい松平定信は、將軍家斉みづのぶに煙たがられ、家斉が青年になると罷免ひめんされてしまう。

この反動で文化十四年（一八一七）には側用人そばようじんの水野忠成ただあきらを老中とし、賄賂政治わいろと貨幣鑄造策を推奨した。

家斉は奢侈しゃしで放縦ほうじゆうな生活に溺れ、幕府財政は破綻の一途をたどる。大奥に多数の妻妾さいしやくを抱え、実子は四十人を超えたという。

江戸文化は家斉の時代に爛熟らんじくを極め、化政文化かせいとして結実した。最も江戸時代らしい、華やかな時代。

枝から落ちる寸前の熟れすぎた果実のように、あらゆるものが妖しい芳香を放っていた。

徳川の治世は、終わりが近づいていた。

爛熟した文化、華美な江戸の暮らしと相反して、地方の農村は貧しく、生活は悲惨だった。

異国の船の来航が頻繁になったが何も対策を講じず、徒に時を濫費した。

農村では一揆が頻発し、尊皇攘夷の思想の萌芽が見られた。

そしてこれからわずか四半世紀後に、盤石と思われた幕府は、瓦解してしまふのである。

家齊は天保八年（一八三七）に將軍職を家慶に譲るが、その後も大御所として君臨した。

その煙たい父が死去してようやく、十二代將軍家慶が、四八歳で実権を握った。

家慶は直ちに父の賄賂政治を否定するよう老中・水野忠邦に命じた。彼は「天保の改革」に邁進するが、細かすぎる性格と狭量のため、多方から反発を食らってしまった。

特に「三方領地替え」や「上地令」は不評で、撤回を余儀なくされた。かくして若手官僚・水野忠邦は門閥政治に敗北し、若き老中・堀田正睦にその座を譲ることとなる。

今まさに、天保の世が終わろうとしている。

天保十五年（一八四四）は十二月二日に弘化元年に改元し、一月未満で新年を迎えたため、天保は実質十四年間、と考えてよいだろう。

天保とは、そうした過渡期であり、動乱の時代の始まりでもあったのである。

和田泰然たいぜんは、老いてなお意気盛んな父・藤佐とうすけと向かい合い、洪面じゅうめんを浮かべていた。

泰然は、長崎から戻った直後、医者町として名高い両国・薬研堀やげんぼりに私塾の蘭医塾、「和田塾」を立ち上げた。薬研とは、薬草をすりつぶす、医家の道具である。

彼は長崎から多数の蘭書を持ち帰り、林洞海とうかいや三宅良斎みやけりょうさいといった優れた蘭医学者を率いて、最先端の蘭医学を教授した。当然ながら評判がよく、繁盛していた。そんな風に順調だった泰然に冷や水を浴びせたのが、父・藤佐の八方破れの振る舞いだった。

「親父殿はもう年なんだから、いい加減、少しおとなしくしていきくんねえかな」

「儂わしは、自分が稼いだ金で好き勝手に暮らしておる。だいたい、お前がやりたい放題できるのも、儂が稼いだおかげだろう。おぬしこと如き

にとやかく言われる筋合いはないわ」

いやはや、まったくもって、おっしゃる通りなんだがな、と思い、泰然は苦笑する。

だが藤佐の無鉄砲な行動によって、泰然が、いや、佐藤家が窮地きゆうちに陥おちいってしまったことも、また厳然たる事実だった。

なにしろ藤佐と泰然、弟の然僕ねんぼくの三人が、お白州しろすに引き出される羽目になったのだから。

「そもそも、あんな滅茶苦茶な転封てんぽうが成り立ったら、お上の權威かみも秩序もガタガタになってしまふ。そう思ったから、お前も儂に協力したのであろうが」

父・藤佐は、全く悪びれた様子もなく、嘯うそぶいた。

「まあ、それはそうなんだけども」

日頃の威勢は見る影もなく、泰然は齒切れが悪い。

三年前の天保十一年（一八四〇）十一月、世間を騒然とさせるお達しがあった。

出羽庄内藩主でわしょうないはんしゆの酒井忠器ただかたを越後長岡えちごながおかに、武州川越藩主ぶしゅうかわごえの松平大和守やまとのかみを庄内に、長岡藩主まさのびんごのかみの牧野備後守まきのびんごのかみを川越に転封する、という唐突な領地替えの命、世に言う「三方領地替え」だ。

財政難に苦しむ幕府は常に、鶺鴒うの目鷹たかの目で大名たちの不祥事を探して、落ち度を見つけては領地を天領に召し上げたり、譜代大名ふだい

を優遇するような国替えをしていた。

しかし、この度の三角トレードは特段の落ち度はなかった。

そもそもこの強引な転封は、首席老中の水野越前守が、公儀に近い松平大和守に阿るための姑息な画策だったといわれている。

この御沙汰に驚いたのは、明君の誉れ高い酒井家に長年統治されていた、庄内の民である。

庄内藩は小藩ながらも、暮らし向きは豊かだった。酒井侯が封じられて二百年余、酒井の殿さまは領民を愛し、善政を敷いた。天保の大飢饉の際も、藩内では飢餓で亡くなった者はひとりもいなかったという。

転封の話聞いた庄内の農民は、悲憤慷慨するあまり、「百姓といえども二君に仕えず」という箴旗を掲げて、幕府への直訴を企てた。

それは心情的によくわかるし、天晴れでもあった。

そうした動きを耳にした藤佐は、一肌脱ぐことにした。

家督を妹に譲ったとはいえ、藤佐にとって庄内は生まれ故郷だ。

その民が悪政に苦しめられるのを見過ごすことは、義侠心あふれる彼には我慢ならなかった。

天衣無縫の縦横家・藤佐は、農民の直訴だけはなんとか回避しようとして苦心した。

そんなことになったら、幕府は振り上げた拳を下ろすに下ろせなくなってしまう、却って事態を悪化させるだけだ、ということを見通していたからだ。

そのため、息子の泰然を手足の如く使い情報を集め、その上で自身も仇敵にあたる松平大和守の懐に入り込み、内部から崩壊させようと企てたのだ。

それは、藤佐が知遇を得ていた矢部駿河守の、「一度謹慎し捲土重来を図るべし」という提案に、上乘せした鬼謀でもあった。

虎穴に入らずんば虎児を得ず、というわけか、と泰然は考えた。そして続けて呟いた。

——まあ、親父殿にとってはおの程度のことは、虎児ではなく、猫の子をさらうような心持ちだったのだろうが。

その計略は万全を期した、水を漏らさぬようなものはずだった。しかし、藤佐の隠密行動は早々に露見してしまった。それは大きな計算違いだった。

このため藤佐は、庄内の民からは裏切り者、幕府からは転封反対運動の煽動者と見做され、にっちもさっちもいかなくなり、進退が窮まった。

翌天保十二年六月、八方塞がりになった佐藤藤佐は、長男の泰然と次男の然僕と共に一家三人、首席老中の水野越前守の命により、

お白州で江戸町奉行の矢部駿河守のお調べを受けることとなった。
——まずいことになった。

そう思った泰然は、舎弟の林洞海を二度目の長崎留学に送り出すことにした。

費用は全額、泰然が持った。

今や、佐藤家のお家取り潰しは十分に考えられた。

財を召し上げられるくらいなら、舎弟の蘭学修業の費用に充てた方がマシだと考えたのだ。

あとは恭順の意を示し、お目こぼしを願うことくらいしか、泰然には打てる手は思いつかなかった。

ところが藤佐はここで、驚くべき蛮拳ばんきょに出る。

お白州で臆することなく、酒井忠器の善政を賞賛し、今回の転封の議を正面から非難して、転封は取り消すべし、と堂々と主張したのだ。

お白州に座り、隣で聞いていた泰然は仰天した。

お上の政まつりごとに対して、お白州で私見を述べるなど前代未聞、あり得べからざる事ことだった。

まさに破天荒な公事師くじしとして名を馳はせた、佐藤藤佐の面目躍如めんもくやくじよである。

藤佐は、大塩平八郎おおしおへいはちろうの告訴文を揉み消した江戸奉行だから、自分

の発言も黙殺もくさつするだろうと踏んでいた。当然、死罪を覚悟の上での陳述だった。

ところが取り調べにあたった江戸町奉行・矢部駿河守は、もともと藤佐の相談を受け密かに自分の画策を伝えたという、腹芸のできる大人物だった。なので同情の気持ちも強かったのだろう、あろうことか、藤佐の捨て身の陳述に感動してしまった。

その結果、藤佐の言い分を認め、酒井家の転封中止命令を出してしまっただった。

誰もがあつと驚く、大逆転劇である。

ただし、その代償は大きかった。

翌天保十三年（一八四二）七月、老中水野越前守に大恥を搔かせた矢部駿河守は禄召ろくし上げの上、桑名藩くわなにて蟄居ちつきよとなる。彼は抗議のため断食だんじきして死を選んだ。

それに抗議して翌天保十四年（一八四三）九月、主席老中・水野忠邦と対立していた老中・堀田正睦も老中職を辞し、佐倉さくらに舞い戻った。

こうした混乱こんらんを咎とがめた主上は同月、お気に入りひの水野越前守を罷免めんしたのである。

反水野派の頭目とうもくと目された藤佐にしてみれば、万々歳の決着だった。しかし今後、水野派の残党がどのような嫌がらせをしてくるか、

想像もつかない。加えて、公儀に対する反逆者、地元では裏切り者という、二重の汚名を着せられた藤佐は、両陣営から憎まれ、どこにも味方がいないという苦境にある。

こんな状況では、いつ何時、どの方向から矢が飛んでくるか、見当もつかない。

だが藤佐は、自分の行動を釈明しなかった。憤死した矢部駿河守への忠義立てからだ。

それ故、藤佐は親族以外には終生、事件の真相を語ることはなかった。

泰然が開いた和田塾は、今や「西の適塾、東の和田塾」と呼ばれるまでになっていた。

泰然は江戸にすっかり地歩を打ち立てていたのである。

しかし「蚕社の獄」の余波で相変わらず、蘭学に対する風当たりは強いままだった。

天保十二年、大阪奉行は、シーボルトの門人・高良斎が翻訳した梅毒の治療書「驅梅要方」を発禁処分にした。

更に同年十一月には、幕府は、医師の風儀肅正を厳命している。

翌天保十三年六月には、翻訳書出版は、「医学館」で検閲の上、町奉行の許可を得るという仕組みに改悪された。

「医学館」は別名「躋寿館」とも呼ばれ、蘭学を敵視する漢方医の

牙城がじょうだった。したがってこれは事実上、蘭書の禁止に等しかった。漢方侍医じいの頭領・多紀家たきによる、蘭学潰しの策動の一環だった。そこに水野派の残党が結託すれば、ちつぽけな和田塾などひとたまりもないだろう。

そんな状況にあることを、泰然は、得意の「早見え」で読み切っていた。

天保十四年四月、庭に桜が爛漫らんまんと咲き誇っているある日、泰然は藤佐に告げた。

「親父殿、おいらは堀田さまの所領に移ることにした。佐倉に家を買ったよ」

「ほう、和田塾は畳たたむのか？」

「いや、あそこは舍弟の洞海に譲って、アイツに長女のつるをやるうと思ってる。そうすれば義理の息子になるわけだし」

藤佐は腕組みをして、少し考えた。それからにっこり笑う。

「まあ、悪くない判断だな。堀田さまのところへ行くのもいい。結局おぬしは、これまでと同じように、儂が一代で築き上げたものを頼って生きていくわけだな」

泰然としては誰のせいでこんなことになったのだという恨み言うらみごのひとつも言いたくなる。

だが、英明な堀田正睦は蘭学や外国事情に強い関心を持ち、藤佐

とは意気投合していた。

だから父がそんな風に言うのも、至極もつともなので、言い返すことができない。

豪放磊落てうほうらいらくでやりたい放題の泰然だが、父・藤佐の前に出ると、手も足も出なくなるような感じになってしまう。泰然にしてみれば、なんとも口惜しく、齒がゆい限りだった。

「親父殿も、おいらと一緒に佐倉に来るといいよ。堀田さまからも、常々、お招きされていただろ？」

泰然がさりげなくそう言うと、藤佐はにやりと笑って、首を横に振る。

「いや、儂は江戸に残るよ。堀田さまには申し訳ないが、この年になって佐倉のような片田舎に引っ込むのは、性しやうに合わん。こんなこともあろうかと思って、家督を次男の然僕に譲っておいたのだ。これを称して『先見せんけんの明めい』と言う。儂は然僕の世話になるよ。なんなら順之助じゆんのすけは江戸に置いていってもよいぞ」

江戸から十二里、たかだか一日の道行きの地を、片田舎と言いつとは……。

親父殿の好き放題のわがままにも困ったものだ、と泰然は吐息をつく。

矢部駿河守が蟄居けいごさせられた係累けいらいで、藤佐が側杖そばづえを食らい、厳し

い処分を下されても不思議はない、と考えられた。だから泰然が佐倉移住を考えたのは、実は藤佐の身の安全を考えてのことが大きかったのである。

それなのに、それをあっさり一言の下に断られてしまつては、泰然の立つ瀬がない。

それにしても、いざこうして考えてみると、「蛮社の獄」で憂国の士の渡辺崋山かざんや小関三英こせきさんえいを死に追いやり、高野長英たかのちやうえいという英俊えいしゆんを永牢えいろうに押し込めた頑迷な老中・水野忠邦を失脚させたのは、結局は親父殿だった、というわけか。

やはり親父殿は傑物けつぶつなのだ、と認めざるを得ないのが、なんとも口悔しい。

かくなる上は、長崎から戻ったばかりの林洞海が、こうした差配を告げられて、あわてふためく様を眺めて、せいぜい憂うれさでも晴らすか、と、泰然は内心で考えた。

「と、とんでもない。オイなんぞに泰然しゃんの代役なぞ務まろうはず、ありまつしえん」

小心者の林洞海のうろたえぶりは想像以上で、泰然はようやく溜飲りゆういんを下げる事ができた。

これが『江戸の敵を長崎で討つ』というヤツか、などとトンチン

カンなことを思いながら、泰然は、くつくつと含み笑いをした。

「そんなことはないだろうさ。おいらは和田塾では、ふんぞり返っ

て手下の連中に、大雑把おおざっぱに指図さしずしていただけよ。長崎でニーマン商

館長つうじや通詞ならばやしえいけんの榎林栄建殿から学んだ、教科書抜きのやり方だよ。お

いらは蘭語はあまり得意でないが、洞海は二度も長崎に行つて、蘭

語ばかり熱心に学んできたんだ。お前の好きなようにやれば、そん

じよそこらの蘭学者なんぞ、太刀打ちたちうできんだろうよ。和田塾は間

違いなく、江戸一番の蘭学塾になると思うぜ」とお世辞せじ半分で泰然

が言うと、洞海は心細げに言う。

「そうでしょうか。ばってん、オイがつるさまめとば娶めとるなど、いくら

なんでも……」

「なんだ、お前はつるが嫌いなのか」

「そげんこつ、なかです」

消え入るような声でそう言った洞海は、耳たぶまで真っ赤にして

うつむいてしまふ。

泰然は苦笑しながら言う。

「なんだ、嫌いでないのなら、よいではないか。おいらが瀧子たきこを娶

った時も、似たようなものだったんだから。それに、おいらのとな

でもない横暴ぶりを間近で見えたつるには、洞海が聖人君子のよ

うに見えて心底尊敬して仕えるだろう。だから、夫婦田満間違いな

し。めでたしめでたし、だ」

自分で言っておきながら、まったくもっておいらはとんでもないヤツだなあ、としみじみと思う。だが、その穴埋めにはまさにぴったりの差配だなあ、と思い、やっぱりおいらは大したもんだな、と自画自賛することも忘れなかった。

確かにそれは適切な判断であり、妥当な自己評価だった。

菓研堀の和田塾を任せる洞海に娘を嫁がせ、義理の息子としておけば、万が一和田家や佐藤家がお取り潰しになっても、血脈は受け継がれていくのだから。

泰然は思い出した、というような口調で付け足した。

「ついでに、順之助は江戸に置いていくから、面倒を見てくれよ。

頼んだぞ」

親父殿に頭を下げるのは癩しやくに障さわるが、洞海なら堂々と威張いばつて頼むことができる。

長男の惣三郎そうざぶろうは、長崎留学に行く前に、義兄の山内豊城やまうちよしかの養子にしてある。

次男の順之助も、はや十歳。あいつはいずれ、良さんに引き取ってもらおうことにしよう。

あの家には器量よしのひとり娘がいるが、男の子はいないから、きつと喜ぶだろう。

猫の子のように、自分の子をあちこちにばらまく泰然には、お家大事という常識とらに囚とらわれる気持ちは微塵みじんもない。

それは父・藤佐から受け継いだ気風だった。

そんな洞海の隣には、顔立ちの整った、貴公子然とした青年が控ひかえている。

兄弟子のうろたえぶりを隣で眺めて、懸命に笑いをこらえている若者の肩を、泰然はぼんと叩いた。

「ニヤついている場合ではないぞ。佐倉ではお前を統領にして、存分に働いてもらおうつもりなんだからな」

すると青年は、驚いたように目を見開く。

「ご冗談を。自分は入門して一年も経っていません。そんな大それたこと、無理です」

いきなり大役を振られた若者は、今度は自分があわてふためく番になった。

ここぞとばかりに林洞海がやり返す。

「オイを笑った罰ばつたい。泰然しゃんに見込まれる大変さを思い知るがよか」

すると、若者はすぐに落ち着きを取り戻し、不敵に笑う。

「わかりました。師匠と兄弟子が、やれ、とおっしゃるのなら、やって進ぜましょう」

そんな強気な若者を、泰然は頼もしげに眺める。

弱冠十八のその青年こそ、不世出の天才外科医と謳われ、泰然の養子になり、明治初期の日本医学を牽引する山口舜海、後の佐藤尚中である。

山口舜海は文政十年（一八二七）、下総小見川藩医・山口甫仙の次男として生まれた。

十六歳の時、師事していた医院で、師の留守中に大怪我をした農民が担ぎ込まれてきた。

舜海はためらうことなく、手元にあつた裁縫道具の針を使って傷を缝合した。その手際は鮮やかで、治療を受けた農民は痛みを訴える間もなく、缝合が終わっていたという。

その様子を聞いた師は、こんな田舎の医院に埋もれさせる人材ではないと悟り、旧知だった薬研堀の和田塾に紹介した。

それはまさしく、泰然の盛名が引き寄せた逸材だった。

泰然は、自分が見出した原石の輝きを、目を細めて眺めた。

江戸で旗揚げした一番の収穫は、この逸材を得たことだな、としみじみ思う。

そして遠く、西方を眺めやり、ひとり呟く。

——章よ、お前は、コイツに匹敵するような麒麟児を見出せたか？

本来、地道な学業に励むことが不得手な性の泰然が、ここまで和

田塾を盛り立てられたのは、その大度量と適材適所の人材を見抜く力、そして西方で名を馳せている洪庵こうあんの適塾への対抗心からだ。

——『西の適塾、東の和田塾』だと。ふざけるなよ。すもう角力の番付ばんつけだつて東から呼び上げられるんだ。『東の和田塾、西の適塾』だろうが。

負けず嫌いの泰然は、洪庵の後塵こうじんを拝はいすることだけは、我慢がならなかった。

だが「蚕社の獄」以来、江戸の窮屈きうくつぶりには拍車が掛かっていた。

昨年六月には翻訳書の出版は、「医学館」が検閲した上での町奉行の許可制となった。

蘭学こうりゆうの興隆しゅうしを嫉視する漢方・多紀家が仕切る抵抗勢力の根城「医学館」に、蘭書の出版の可否を任せたら、新刊の蘭書が刊行されなくなるのは火を見るよりも明らかだ。そうなったら、蘭学者にとって血流を途絶されるようなもの、死んだに等しい。

完全な逆風の中、都落ちとなった泰然だが、全くめげていない。

——おいらは『先読み』で佐倉のド田舎に行く。けど、ここからが本当の勝負だぜ、章よ。

そう呟いた泰然はしみじみ思う。

考えてみれば今回の決断も、親父殿のやんちゃのおかげと言えないこともない。なんだかんだいって親父殿は、おいらを開運してくれる、ありがたい父君かもしれん。

佐倉では改姓して佐藤を名乗り、親孝行の真似事まねじでもしてみるか、と泰然は思った。

*

佐倉藩は公称十一万三千石の小藩である。家臣はおよそ一千人。

領地は現在の千葉から成田まで及ぶ広範な地域であり、更に山形にも蔵王山ぞうざん周辺に同じ程度の領地を有していた。その広大な地域の行政費を捻出するには、十一万石という石高は驚くほど少ない。

佐倉藩が長年、財政破綻状態で苦しんでいたのは、ある意味でやむをえないことだった。

佐倉城は文化十年（一八一三）の大火で焼け落ちて以後、再建されることがなかった。それも、藩の財政が苦しかったためである。

堀田正睦は、従兄いとこの先代正愛まさちかと同様、佐倉城天守閣を見たことがない藩主だった。

佐倉の地は江戸からは近く、多少の無理をすれば入国は、一日で済ませることができた。

真夜中の子の刻ねこくに江戸数寄屋橋御内門すきやばしにあった江戸上屋敷を発し、船橋宿で昼食、申まゐの刻さくに佐倉城に到着する、という強行軍である。それもまた、経費削減のためだった。

佐倉藩堀田家第九代当主、堀田正睦は文化七年（一八一〇）八月一日、江戸の数寄屋橋御内門にあった江戸上屋敷で生まれた。洪庵と同年である。

正睦は七代目当主の父・正時まさとき五十歳の時の子である。四十五歳で藩主になった遅咲きの父は、菊の花を愛する風流人だったという。

父・正時は、兄の子の八代目正愛に家督を譲ったものの、正愛に子がなかったため、九代目には正睦が就任し、相模守さがみと称した。

文政八年（一八二五）、正睦十六歳の時である。

正睦は、父と息子の二代に渡って、「やつかい厄介様」の境遇から、藩主になったのである。

幼い正睦は、江戸の渋谷広尾の下屋敷で育てられた。

正睦に多大な影響を与えたのが、後見人に当たる佐倉藩の支藩、

佐野藩一万六千石の城主、堀田正敦まさあつだった。

正睦が生まれた時、堀田正敦は五十二歳で、四半世紀も幕府の若年寄どしよりという重責にあった。

文化四年（一八〇七）には、「えぞ蝦夷防衛総督」に任じられている。

文化元年（一八〇四）九月、国書を携たずむえ来日したロシア使節レザノフに対し、幕府が粗略そりやくな対応をしたため、文化四年四月から五月、ロシア軍艦が択捉えとろふや樺太からふと、宗谷周辺そうやで行政施設や日本船を攻撃した。所謂「ろこう露寇事件」である。「いわゆる蝦夷防衛総督」は、こうした事態に対応

するため、急遽設置された部署だった。

この時、幕府の守備隊は、ロシアの攻撃に対し、為す術もなく敗走した。

「武威」を保つことが、徳川が日本を支配する正当性の根拠だったが、その根幹が大きく揺らぎ、幕府の在り方を根底から見直すきっかけとなった大事件である。

天文台総頭を兼任した堀田正敦は、文化八年（一八一二）には翻訳局を置き、馬場佐十郎、大槻玄沢らにロシア語の翻訳事業をさせた。それはロシアの脅威に対処するためだった。

堀田正敦は、まさしく、文化年代の国防の要となる人物だった。その人物から直接の薫陶を受けた堀田正睦は、奇しくも半世紀後、同じような役割を担うことになる。

正敦は、面倒見がよく、縁戚にあたる佐倉藩についても、常に心を砕いてくれていた。

おかげで正睦は、江戸で過ごした幼少期に、最先端の蘭学に触れることができ、大いに触発されていた。

スケールの大きい彼の政治感覚は、幼少時から醸成されていたのである。

天保三年（一八三二）、堀田正敦が死去すると、佐倉藩の年寄役、渡辺弥一兵衛治は、正睦の後見人になった。彼は、正睦が幼い頃か

からお付きを務めていたため、正睦の人となりや願望をよく理解していた。

すると翌天保四年（一八三三）、正睦は「佐倉学問所」を拡充し、「成徳書院」とした。

正睦は学問の重要性を身に染みて知っていたし、蘭医学のすごさもよくわかっていた。

かつて渡辺が背中に瘍でまものを患わずらった時、漢方医は手こまねを拱あいでいるしかなかった。ところが新米の蘭医が手際よく処置すると、あつという間に快癒かいゆした。そのことは、この主従に強い印象を残していたのだ。

堀田正睦は、「西洋堀田」と呼ばれるほど、蘭学けいとうに傾倒らんぺきした蘭癖大名として名を馳せていた。

蘭医学を推進しようとした時、渡辺弥一兵衛治の影響はきわめて大きく、泰然を佐倉藩に招請しょうせいしたのも、そうした彼の尽力があったのである。

*

天保十四年八月、江戸を引き払った泰然は、佐倉に移った。それから二カ月後の九月末、第九代佐倉藩主・堀田正睦候によくお

目通りを果たした。

「よう来たな、泰然。余は首を長くして待つておったぞ」

正睦候は、気さくに話しかけてきた。満面の笑みには、泰然から思う存分、長崎や蘭学の話聞けるといふ、喜びにあふれている。

よう来た、とは言うものの、江戸城で老中を務めていた堀田正睦の辞任が認められたのは、泰然が佐倉に到着した五十日後、九月末のことだった。

だから、首を長くして待つていたのは、実は泰然の方だった。

それでも、佐倉に戻ってすぐに泰然を召したのだから、その言葉には偽りは無い。

「は、恐縮至極、汗顔かんがんの至りいたでございます」

泰然は両手を畳へいやくについて平伏する。

「よせよせ、らしくないぞ、泰然。いつもと同じよう構わぬ」

さほどしばしばお目通りしてはいたわけでもないが、江戸の下屋敷でお目に掛かる時はいつも、堀田候は気安く、ざつくばらんだった。

なので泰然もつられて、知らず識しらずのうちにぞんざいな口調になつていた。

泰然が正睦候に初めてお目通りしたのは、後見役の堀田正敦がまだご存命だった、天保二年（一八三一）頃だった。

自分より六歳年下の堀田候は章と同じ年か、と思つた時から、畏おそれ

多いことに、洪庵を相手にする時と同じような気持ちになった。要するに、上から目線で言いたい放題をする、といういつものスタイルである。それは、武家のしきたりでは、許されない無礼である。

だが、もともと破天荒な父・藤佐に育てられ、伊奈家では年の近い当主と友人のようにつきあってきた泰然にとっては、さして不自然なことではなかった。

それでもさすがは譜代のお殿さま、居城の佐倉城で、正式にお目通りすると、自然に威儀を正してしまう。

「らしくない」というのは、まったくもってその通りだった。

福々しい堀田侯は、穏やかな口調で言う。

「余は口下手ゆえ、江戸の城内では苦勞した。だが、今の世をどのように導いていくべきか、と常に考えておることは、誰にも負けぬ。

おぬしには医学のみならず、藩政についても助言してほしい。しながら余も、今でこそ藩では最上位の地位にあるとはいえ、長年、厄介者の身だった若輩者。おぬしを厚遇できぬのが齒がゆいばかりじゃ」

泰然の待遇は藩の侍医ではなく客分のお雇医で、しかもわずかに人扶持だ。

加えて、蘭医学の教授役にも任ずることができていない。

堀田侯はそうした諸々に、忸怩たる思いがあるようだ。

そこには蘭医・伊東玄朴げんぼくを侍医に召し抱えた佐賀藩の鍋島侯なべしまに対する、そこはかとなない対抗意識があるのかもしれない、と泰然はうつつらと感じた。

なので包み隠さず、泰然は本音を口にした。

「とんでもございません。長崎で蘭医学を修学したとはいえ、おいらは根っからの風来坊ふうらいぼうで、お城勤めは性に合いません。加えて藩政全般についての助言となると、おいらには少々荷が重く思われます。おいらはしがらない蘭学者、そこまでのお役目を果たせるとも思いません。また、佐倉藩は堀田正敦さまのご教導の下、『成徳書院』という蘭医学を教えるご立派な藩校があり、長崎で蘭医学を修めた鐫木かぶらぎ仙安殿せんあん、西敦甫殿がおられます故、おいらは佐倉藩の正式な教師としては無用の身。とりあえず蘭医学をきちんと教えられる蘭学の私塾を作りたいと思っておりますので、学塾の場を提供していただいた過分な御沙汰には、満足しております」

半分は本音だったが、半分は泰然の戦略でもあった。譜代の城に、新参者が乗り込んで口を挟んだら、たちまち排斥はいせきされてしまうだろう。まずは自分の地盤を確立することだ、と泰然は思っていた。

堀田正睦は、穏やかな微笑を浮かべて言う。

「ふむ、欲のないヤツめ。その謙虚な言葉を後悔するくらい使い倒してやるから、覚悟せよ」

「御意。^{ぎよ}それはおいらも望むところです」

堀田正睦は、側に控えている家来に声を掛ける。

「弥一兵衛治、泰然の希望を、よきに計らってやれ」

は、と両手をつけて平伏した重臣・渡辺弥一兵衛治は、面を上げて泰然を見た。

年寄役・渡辺弥一兵衛治は、佐倉藩政の中核を担っていた。

正睦の興味を蘭医学に向けたのも、佐倉藩侍医も務め、佐倉藩の天保藩政改革の立役者である渡辺弥一兵衛治の進言なくしてはあり得なかった。

弥一兵衛治と泰然は、江戸の蘭学塾で面識があった。

正睦との接見を終えて、大広間を退去した泰然は、ほっと吐息をついた。それから何気なく振り返ると、そこに男性の姿があったので、泰然はぎよっとする。

渡辺弥一兵衛治が泰然の背後につき従っていたのだ。

だが気配が全くなく、泰然は振り向くまで、全く気がつかなかったのだ。

「殿に申しつけられたので、明日にでも某^{それがし}が、泰然殿の塾となる土地にご案内いたす」

「おう、ありがたき幸せ、です」

泰然がぎこちない敬語を使うと、弥一兵衛治はにこりともせず

言う。

「無理に袴かみしもを着たような言葉遣いをなさることはありませんまい。

泰然殿はどこにおつても泰然殿なのですからな」

その言葉を聞いた泰然の肩は、ふうつと軽くなった。

翌日。

泰然は渡辺弥一兵衛治に、城下の外れの本町もとまちに案内された。

「天下に名高い稀代きだいの蘭学者、佐藤泰然殿をお招きしながら、このような辺鄙へんびな土地しか用意できず、誠に申し訳ない」

そう言って渡辺弥一兵衛治は、深々と頭を下げた。

泰然は呆然とした。周囲は田畑で囲まれ、百姓の家が、数軒、寄り集まっている。店も一軒もない。まさしく田舎だった。

泰然が購入したのは、その中の一軒の屋敷だった。

茅葺かやぶきの屋根で、普請は立派だった。聞けば、かつてこの辺りで開墾かいこんを考えていた江戸の豪商が立てた家だという。

さすがの泰然も、一瞬、失望の色を浮かべた。

——これで三十五両とは、ふっかけやがったもんだ。まあ、でも親父殿を無理に引っ張ってこなくて、よかったのか。

けれども、泰然は持ち前の気性で、すぐに気持ちを入れ替え、明らかにと言った。

「おいらは江戸で蘭学塾を開いていたとはいえ、素浪人すろうにんのようなも

の。このような地所を用意していただけただけで、大変ありがたいことです。加えて佐倉には、蘭医学を根付かせる土壌ができていますからね。三月には、佐倉藩の鐫木仙安殿が刑死者の解剖を行なったそうですね。蘭医学を導入する際に、越えねばならない一番の難所を既に通っているのですから、ここから先は楽なものですよ」

「そのように考えていただいていると、某もいささか安心いたします。それにしても、さすが、『早耳の泰然』殿、解剖の一件を既に存じだったとは」

「こうした快挙は、江戸でも話題でしたので。それに案ずることはありませんよ、弥一兵衛治殿。今は人っ子ひとりいない辺鄙な土地ですが、十年もしたらおいらの医院と学塾に、大勢の学徒が押し寄せてくるでしょう。だからむしろ周りは、空き地の方がありがたいですよ」

渡辺弥一兵衛治は、さすがにその泰然の言葉は強がりだと思った。けれども数年後、泰然の言葉通りになるのである。

天保十四年十月、弥一兵衛治の協力を得て、佐藤泰然は佐倉城下の東端本町にあった旧家の屋敷を買い上げ、医院と医学塾を構えた。屋号は泰然が好んだ言葉で「易経」えいきよにある「天道に順う」てんどうから取って「順天堂」と称した。

「佐倉順天堂」の創設である。この時、泰然は不惑ふわくの四十歳。

しばらくして泰然は、一番弟子の山口舜海を江戸から呼び寄せた。この後、「日新の医学、佐倉の林中より生ず」という世評を得た。しかしながら父・藤佐は自らが宣言した通り、生涯、佐倉に移り住むことはなかった。

佐倉本町に腰を据えた泰然は、精力的に活動を開始した。

医術教授役の中心に、江戸から呼び寄せた山口舜海を据え、長崎留学の際に大量に買い付けた蘭書を塾生に翻訳させ、教科書とした。

泰然の時代の代表的な薬学の教科書として、林洞海が訳した「ワートル薬性論」がある。

林洞海はこの翻訳書の刊行願いを天保十一年（一八四〇）に出していた。だがその頃は蘭学抑圧時代で、十年以上も塩漬けにされてしまう。

その後、開国により蘭学に対する締め付けが弱まり、ようやく許可を得て刊行開始となったのは、なんと安政三年（一八五六）からとなる。

そんな最先端の蘭書を教科書にした、佐倉順天堂の先進性は確かなものだった。

他に「コンスブルック」、「セリウス」、「モスト」の本が使われた。

特にドイツの外科医、マクシミリアン・ジョゼフ・フォン・セリ

ウスの外科書は、泰然が長崎時代に、部分的に「接骨備要」と「眼病」の章を訳しており、後に山口舜海（佐藤尚中）が「設里烏私瘍学全書」として全訳を果たした、順天堂の基本となる教科書だった。

泰然は「小児全書」全七巻のうち一巻の「痘瘡」に書き込みをしており、実際に人痘術も実施している。

また当時としては画期的な、最先端の医学教育と、医療体制を整えた。

それは後に佐藤尚中が定めた、学生の評価法に見て取れる。順天堂では、蘭書の読解力よりも、治療の巧拙に重点がおかれていた。

医術における一番の業績は、手術承諾書の形式を整え、医療費を明快に規定するなど、医業の基本構造を構築したことだろう。

当時は「医は仁術」という常識の下、医師の収入は不安定だった。

坪井信道は「菩薩医」と賞賛されたが、裏を返せば当然もらうべき医療費を取らないため、貧窮するということでもある。

それでも著名な医師は、江戸に駐在する大名の診察や治療で高額の謝礼をもらえた。

そんな風にして、医師はかろうじて生計を立てていたわけだ。

しかしながら、そんな調子では、医療行為に対し、安定した経済的地盤を築くことなどできなくなってしまう。

そう考えた泰然の、こうした前代未聞の発案は強い反発も招いた

が、やがて藩内では常識として定着していく。

泰然の下には、蘭医の英俊が陸続と集っていた。

最古参の舎弟で義理の息子である林洞海、長崎の留学時代に意気投合した三宅良斎、門人の関寛斎など、錚々たる名医が顔を揃えていた。

佐倉順天堂の盛名は、江戸でも鳴り響き、入門希望者が佐倉に殺到した。泰然が家督を佐藤尚中に譲った時代になると、そこには明治時代に日本の医学の基礎を築くことになる英才も多数集まった。済生学舎を創設する長谷川泰、日本の医学の基礎をドイツ医学に定めることに寄与した相良知安と岩佐純、森鷗外の父の森静男なども門人に名を連ねた。

そうした業績が認められ、弘化五年（一八四八）には泰然は、「御雇以来医学教授出精」という理由で、佐倉藩の給人医師上座となり、八人扶持に増された。

泰然は、医術と医学教育という自分の地盤を、着実に確立していったのである。

*

当初、堀田侯には蘭医学に専念したい、と告げていたものの、当

然ながら藩政への寄与は、泰然の将来構想には含まれていた。

蘭医学者はオランダ語が読める。その能力を欧州の兵学書や砲術書を読むことに転用した者も多い。意識の高い諸侯が、そうした人物を厚遇したのである。

それは身分の低い士分や、能力の高い農民にとって、立身出世を約束する、天上から下りてきた蜘蛛くもの糸のようなものだった。

幕末にはその糸にすがり、多くの有能な人物が世に現れるようになる。

こうした傾向は、「幕末の三傑大名」と呼ばれた蘭癖大名で、特に頭著けんちよだった。

佐賀藩主の鍋島直正侯なごまさは、長崎在住の榊林宗建や大石良英、江戸詰づめに伊東玄朴なるたきなどの鳴滝塾出身者を多く召し抱え、兵書や砲術書の充実を図った。

榊林栄建が長崎の町年寄で日本有数の砲術家でもある高島秋帆たかしましゅうはんと親交を重ね、兵書や砲術書を翻訳していたのは前述の通りである。さつま薩摩藩の島津斉彬しまづなりあきらも、なかなか諸藩からの要請に応じなかった英俊とつかせいかい、戸塚静海を口説き落ととして、藩医に取り立てている。また、高島秋帆に兵法を教わり、城下では製鉄や大砲製造のため、寄り合いを作るなど、西洋風の軍政にいち早く対応している。

宇和島藩うわじまの伊達宗城だてむねなりは、脱獄した高野長英かくまを匿い、彼に藩の兵制

改革をさせ、要塞の設計も委託した。そんな高野長英を陰で支えたのは、鳴滝塾での同窓だった二宮敬作である。にのみやけいさく

二宮との縁で、適塾の塾頭だった村田蔵六ぞうろく（後の大村益次郎）も召し抱えられている。

そうした観点からすれば、泰然を召した佐倉藩も決してひげをとらないと言えるだろう。

かくして、佐倉藩第九代藩主・堀田正睦は、当時最高の蘭学者を手元に置くことになった。

人材という意味では、泰然は当代一の蘭学者だと、その声望は高かった。

オランダ商館長ニーマンから直々に兵法や世界情勢の薫陶を受けた、一番弟子である上に、檜林栄建から蘭医学のみならず、砲術書や兵書の翻訳本も入手しているし、当代随一の兵術家ずいいちとして名高い高島秋帆にも入門を果たしている。そんな最先端の知識を貪欲に吸収した泰然が、時宜じぎを得た献策をすれば、堀田正睦をして、国事多難な折おりの幕府を率いる老中首座の地位へと押し上げていったのは、当然の帰結きけつだった。

やがて泰然は、藩政改革、特に兵学について、堀田正睦に助言を求められるようになり、佐倉藩の藩政に深く関わっていくようになる。

かくして佐倉藩は幕末の動乱期に、他藩よりもひとつ頭が抜けた存在になっていく。

泰然は徐々に、藩の軍政にも近づいていった。

否、近づけられていった、と表現した方が正しいかもしれない。

藩主・堀田正睦の観覧の下、砲術演習が行なわれた時、陪席させられたのは、順天堂を開基して三年後の嘉永三年のことだ。

この頃から泰然は、医学についても藩校で講義するようになっていた。

佐倉藩は他藩に先んじ砲術を歩兵の主軸に据えていた。堀田正睦は、泰然に自慢しなかったのである。演習後の慰勞の祝宴では、佐倉藩召し抱えの荻野流の砲術師が藩主の前で各々、得意げに自慢話を始めた。

ところが泰然はいきなり大笑いを始めた。

怒った砲術師たちに詰め寄られたが、泰然は色を変えず、言い放った。

「みなさんの砲術は子どものおままごとだよ」

満場は水を打ったように静まり返った。

堀田侯が、咳払いをして言う。

「医術のことならともかく、畑違いの砲術に関して、長崎帰りの蘭学通とはいえ、根拠もなき暴言、専門の者にはとうてい許せること

ではなからう。泰然、直ちに釈明し謝罪せよ」

藩主の叱責しつせきに、泰然は平然と言り返す。

「おいらは謝りませんよ。児戯じぎを児戯じぎということが許されないのであれば、おいらは佐倉藩にはいられません。しかし、確かに理由も示さずに児戯じぎと言うのも無礼な話。したがいまして、今からその根拠を申し上げます」

そう前置きをした泰然は、旧来の砲術の欠点と、それを超える西洋砲術の長所と並べ、滔々とうとうと自説かいちんを開陳うすし始めた。

最初のうちは、宴席にいた専門家の間には反感が渦巻うすいていた。しかし、さすがは砲術の専門家だけあって、泰然が指摘する問題点がいちいち的を射ていることを認めざるを得なくなった。そして最後には、泰然が語る西洋砲術の精密さとその威力を実感させられ、身が寒くなる思いに震える者が多数となった。

ここに至って、砲術部門の長が恐る恐る口を開く。

「あいや、よくわかり申した。泰然殿のおっしゃることは、いちいちごもつとも。そこでお聞きしたいのは、泰然殿はいかにしてそのような見識を得られたのか、ということである」

「そりゃあ、おいらは長崎留学した時、高島秋帆殿、榎林栄建殿に砲術の肝を教わったからよ。その上、二人の砲術の師匠に当たるオランダ商館長のニーマン殿からも直々に教わったからな。みんな、

砲術の隅から隅まで、懇切丁寧こんせつていねいに教えてくれたもんだぜ」

砲術家の集団は、一斉に地に膝ひざを付けた。

「恥を忍んでお願いいたす。どうか泰然殿の知識を我等にご教授願えないだろうか」

泰然は首を横に振る。

「そりゃあ無理つてもんだよ。なにせ、おいらは外科医だからね」

「しかし、それでは佐倉藩の面目めんぼくが立ちません。是非ぜひ、ご教示を」

泰然は腕組みをして考え込む。やがて顔を上げた。

「わかった。おいらが直接砲術を教えることはできないけど、誰に教わればいいのか、くらいなら教えて進ぜよう。今、関東で砲術を学ぶとしたら、なんといつても佐久間象山先生さくましやうざんである。藩主はんしゆにお願いして、象山先生に師事できるよう、手配してもらえばよい」

それを聞いていた堀田侯は、打てば響くように言う。

「よからう。砲術班の中から五名を、佐久間象山殿に弟子入りすること認める」

「ありがたき幸せ」と砲術部門の長が頭を下げた。

改めて泰然にお礼を言おうとして周囲を見回したが、その時には泰然の姿は、宴席こっせんから忽然と消えていた。

こんな具合に、泰然は自らが表舞台に立つことなく、裏で佐倉藩の藩政を教導していた。

そうして堀田侯の背後で彼を操るフィクサーとなっていた。
もつともそんなことは、泰然は望んでいなかったのではあるが。
泰然の真意は、医術の充実にあった。

藩の軍政に出過ぎた助言をしたのも、そうすれば泰然の、藩内部での立場が強くなり、それが本来の望みである、医学の充実に直結すると考えたからだ。

この忠言ちゆうげんを足がかりにして、泰然は江戸から自分の片腕である三宅良斎を呼び寄せ、正式に佐倉藩召し抱えの侍医にもらった。

こうして佐倉順天堂は、養子の佐藤尚中を筆頭とし、その下に三宅良斎、銚子ちやうしで見出した関寛斎、更に新星・佐藤進すずむという陣容で、いよいよ勢威を誇っていく。

その一方で、佐倉順天堂の評判は、好評と悪評が相半ばあいなかばしていた。

順天堂の塾生たちは、蘭学を目指す若者の常として、現在には不遇にあり、しかも野心だけは満々だった。強固な幕府の身分制は揺らいでいたけれども、だからこそ旧来の勢力の締め付けは厳しいものがあった。そうした軋轢あつれきが、もろに学塾に現れるのだった。

乱暴狼藉する不埒ふちちな者も多く、周囲の農家からは悪評ふんがん芬々だった。

このため泰然は、自分の好みではなかったが、塾生に厳しく学則を課すことになる。

——まったく、おいらが若い連中に、酒を飲むな、勉学に励めなど

と、抹香臭い説教をすることになるなんざ、夢にも思わなかったぜ。

泰然がそんな風に愚痴るのも、仕方がないことに思われた。

そんな苦勞をする一方で、泰然は、堀田正睦と渡辺弥一兵衛治の厚誼こうぎに応えるため、佐倉藩の医療の充実を図った。

地味ながらも重要な仕事として、佐倉藩の城下で横行していた乳児の間引きを止めさせることに腐心ふしんした。

貧しい農民は、夫婦で働かないと生活が立ち行かない。母親が子育てに専念すると、家庭が成り立たなくなってしまう。だから乳児を間引くしかなかったのだ。

けれども、そうした悪弊あくへいが、藩政に及ぼす影響は思っているよりもはるかに大きい。

そこで泰然は、藩主の堀田侯を説き伏せ、お達しを発してもらうことにした。

これはきわめて効果が大きく、次第にその悪習はなくなっていくた。

次に着手したのは痘瘡の予防の種痘術しゅどじゆだ。

佐倉藩では間引きの次に、痘瘡による幼児の死亡が多かった。

これも長崎帰りの泰然の知識が役立った。

彼は長崎で見聞した人痘術の実施を決め、長崎で知己となった檜

林宗建に依頼し、人痘の種を送ってもらったのだ。

そしてすぐさま種痘に着手したが、こういう地道な仕事はあまり好みではなく、気がつく^{せつびょう}と絶苗^{せつびょう}して、種痘所は開店休業状態になってしまった。

そんな風に、様々な問題に精力的に着手した泰然は、いつしか佐倉藩において、なくてはならない存在となっていた。

けれどもそんな泰然の関心は、常にまっすぐ、西に向けられていた。

彼は、洪庵に負けるのだけは、どうしてもイヤだったのである。

*

そんな風に泰然が、対抗心を燃やしているとは露知らず、洪庵はその頃、穏やかで充実した日々を送っていた。

生後半年で長男を亡くした悲しみは癒え^いなかつたが、「フーフエランド」の内科医学書の翻訳を終えることができた。

シーボルトが推薦してくれたので、その書の内容を知り、江戸の師・坪井信道の「安懐堂^{あんかいどう}」で遭遇して以来、翻訳に取り組み続けた、洪庵にとっては因縁深い名著だ。

これぞ洪庵^{ひつせ}畢生のライフワークといえるものだった。

——これでようやく、師の墓前に報告できる。誠に長かった。

洪庵はそう呟いて、ほっと胸をなで下ろした。

ところがそんな名著である「扶氏経験遺訓」と題した全三十巻に及ぶ大著は、刊行の目処が全く立っていないなかった。

それでも辛抱強く待ち続ける根気を、洪庵は持ち合わせていた。常に不遇と隣合わせで生きてきた洪庵には、その程度は困難とは思えなかったのだ。

そんな中、洪庵は、足守から両親と姉を大坂に呼びよせ、歓待することにした。

出産のために里帰りする八重も同行し、名塩にほど近い名湯・有馬温泉で、自分の両親と八重の両親を合わせた大人数の身内で、ゆったり過ごした。

それは、長男を亡くした悲しみや、出版の目処が立たない新著という、行き詰まりの日々の中に差し掛けた、木漏れ日のような穏やかな時間だった。

その直後の八月一日に、次男の平三が生まれたのも、洪庵の気持ちを明るくしてくれた。

この平三こそ、後に緒方家の統領となり、明治時代の医学の土台を支える医師、緒方惟準である。

洪庵はようやく、どん底から脱したような心持ちになった。

潮目が変わったのかもしれない、とふと思う。

父・惟因これよりは前年、洪庵の兄の惟正これまきに家督を譲り、隠居していた。

父は足守藩の主君・木下家きのしたに五代にわたり尽くしていた。少しずつゆつくりと出世の階段を上ったが、出世を目的としたことは一度もなく、常に人の道の倫理を説いた。

好好爺こうこうやとなった父の、忠君報恩ちゆうくんほうおんの教えは、洪庵の心身に沁みこんでいる。

父・惟因は、お上に忠義を尽くし、そのことになんの疑いも持たずに済んだ、最後の幸せな世代だったのかもしれない、と洪庵は思う。

お上の権威が大きく揺らぎ始めた天保の世が、終わろうとしていた。

そして世は、短い弘化時代を経て、嘉永という大激動の時代に入する。

それは洪庵にとっては、大いなる飛翔の時代となったのである。

(つづく)